

池山古墳発掘調査 現地説明会資料

調査場所	宇治市菟道池山 32	名称	池山古墳
調査機関	宇治市歴史まちづくり推進課 TEL 0774 - 21 - 1602		
発掘理由	宅地造成に伴う事前調査（民間受託事業）		
調査期間	平成 26 年 11 月 25 日 ～ 平成 27 年 2 月 28 日（予定）		
発掘面積	650 m ²	発掘深度	0.3～1.8m
検出遺構	掘込地業・土坑・ピット・溝	出土品	土師器・須恵器・埴輪・瓦質土器・瓦・陶器・磁器・金属製品（銅製品・鉄製品）・骨 コンテナ 5 箱分

1. はじめに

池山古墳は、菟道池山に所在する直径 44m の円墳とされてきました。市内中央の東西丘陵上にある円丘の南側には方形に張り出す地形がみられることから、造り出し部をもつ円墳ないしは短い前方部をもつ前方後円墳の可能性も考えられてきました。また、円丘頂部（＝墳頂部）には川原石とみられる礫が散見され、石室などの埋葬施設の存在を窺わせていました。平成 24 年度に宅地開発事業が計画されたため、翌年度に試掘調査をすることになりました。

試掘調査は、円丘頂部を中心として方位に沿った十字形のトレンチ調査区を設定しました。西方の調査区はやや南に振り、墳丘の裾端とされる位置まで延ばしました。その結果、葺石・埴輪等は検出されませんでした。古墳時代後期の土器、縄叩きの平瓦、土師器片などが出土し、古代から中世の墳墓群の存在が予想されました。

この成果を踏まえ、今回は円丘頂部および円丘西側から南側斜面にかけての約 650 m²を調査しました。

2. 調査の概要

調査前の現況は、全域が竹林となっていました。それ以前は、方形の張り出し部には茶畑、円丘には小型モノレールが敷設され、溝で区画されて農地として利用されていた跡がありました。円丘東側には、川原石の方形囲み基壇に石仏 1 基が現存していました。

今回の調査は試掘南北トレンチを利用し、円丘頂部で直交する東西トレンチを再設定して確認することとしました。全体としては竹を抜根しつつ、表土掘削を進めました。その結果、円丘の南側が 4 段の雛壇状の地形になっており、円丘頂部（＝上段）、中段、下段に遺構が広がっていることが判明しました。

円丘頂部の地山は、北半部では表土から 10cm 下で現われ、円丘中心部から南半部にかけては約 70cm 掘り込んで、その内側に拳大の砂礫で人工的に盛って突き固めていること（掘込地業）が明らかとなりました。掘り込みの底面は平らにしている、ここに平瓦が散布していました。この掘込地業によって円丘頂部を平坦にし、縁周りの幅 1 m 分は約 10～30cm 高くしています。すなわち、上段北側は地山を削り出し、南側は粘土を盛っています（図の網目範囲）。平坦面では東西長軸上に土坑が 2 つ穿たれており、底

部には炭層が若干残されていました。

中段では、西寄り土坑 7 つ、溝およびピット 1 つずつを確認しました。溝は円丘南側にあり、長さ 9 m、最大幅 2.2m、深さ 60cm を測ります。北側は上段裾を抉るように掘り込んでいます。断面が逆蒲鉾形で、浅黄色の砂の埋土中位下方には礫が敷き詰められたような礫層が検出され、その直下で少量の埴輪片が溝の底に張り付くように出土しました。ピットは南西端にあり、一辺 40cm の方形を呈します。また、東寄りでは下段にかけて、土坑 6 つを確認しています。一辺 1m、深さ 60cm 前後の方形で、規模や配置に規則性があり、拳大の礫を含むものが多くあります。

3. 出土遺物

円丘頂部では丸瓦、平瓦、瓦質土器の宝塔・火鉢の破片、石鍋の破片を再利用した温石、銅製品とみられる薄片、骨片など、中世から近世にかけての遺物が出土しています。中段や下段にかけては土師器、須恵器、陶磁器、瓦の破片などの古墳時代から近世にかけての遺物が出土しています。

また、古墳に関する遺構は確認できませんでしたが、円丘頂部では近世以降の開削された溝から古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器の杯蓋（TK209～217 型式併行期）、中段では古墳時代後期の埴輪（V 期）片が出土しています。

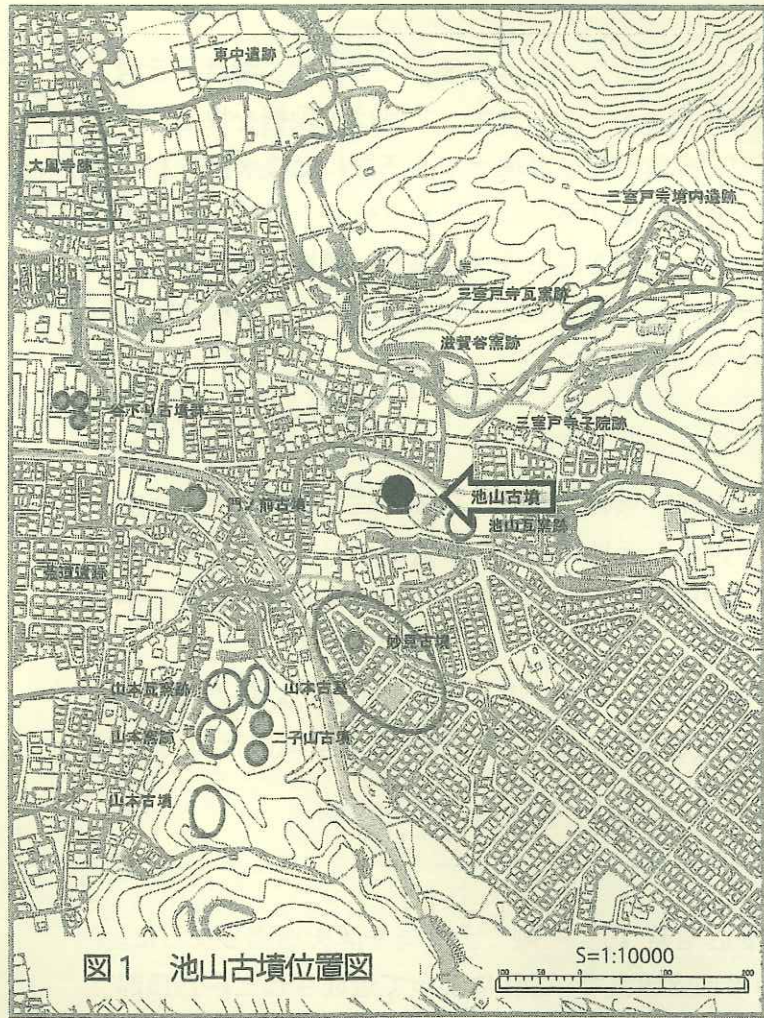
4. まとめ

調査の結果、円丘頂部で近世以降の掘込地業、円丘南側で土坑群や溝を確認しました。掘込地業は上部に構造物を築くための地盤改良で、これによって造成された円丘頂部の平坦面は、その周縁部を一段高くして囲み、周縁部からの規模は東西 12m × 南北 11 m を測ります。南東側が崩れているため、元来は両辺とも 12m の正方形プランに復元できます。東西長軸上に 2 つの土坑がありますが、砂礫で充填されていることから、掘込地業と一連のものと考えられます。平坦面では柱穴跡は検出しませんが、小規模な建物が存在した可能性が高いと思われます。

円丘中段西寄りの土坑には石組のあるものも含まれます。また、東寄りでみられる方形土坑群は、規模や拳大の礫を含む共通性がみられます。ここでは配置に規則性があることから墓坑とほぼ判断できます。市内の下居遺跡に類例があります。

円丘頂部のほか、中段、下段でも古墳時代から中世にかけての遺物が出土していますが、近世のものが多くを占めています。周辺の妙見古墳や二子山古墳でも中世墓があり、室町時代に制作された特徴を備える石仏が中段に現存することは、当地の墓地としての利用を今日に伝えているのかもしれませんが。

また、古墳としての構造物は確認できませんでしたが、円丘頂部で須恵器の杯蓋、中段の溝では埴輪片など古墳時代後期の遺物が出土しています。このことから、後世に円丘頂部が大きく改変される以前には、埴輪棺などが存在した可能性があります。小規模な埋葬施設を主体とする土坑墓として円丘が利用されたのでしょう。



1. 調査前の池山古墳



2. 円丘南側のひな壇地形(試掘南トレンチ)



3. 石仏と円丘頂部(東から)



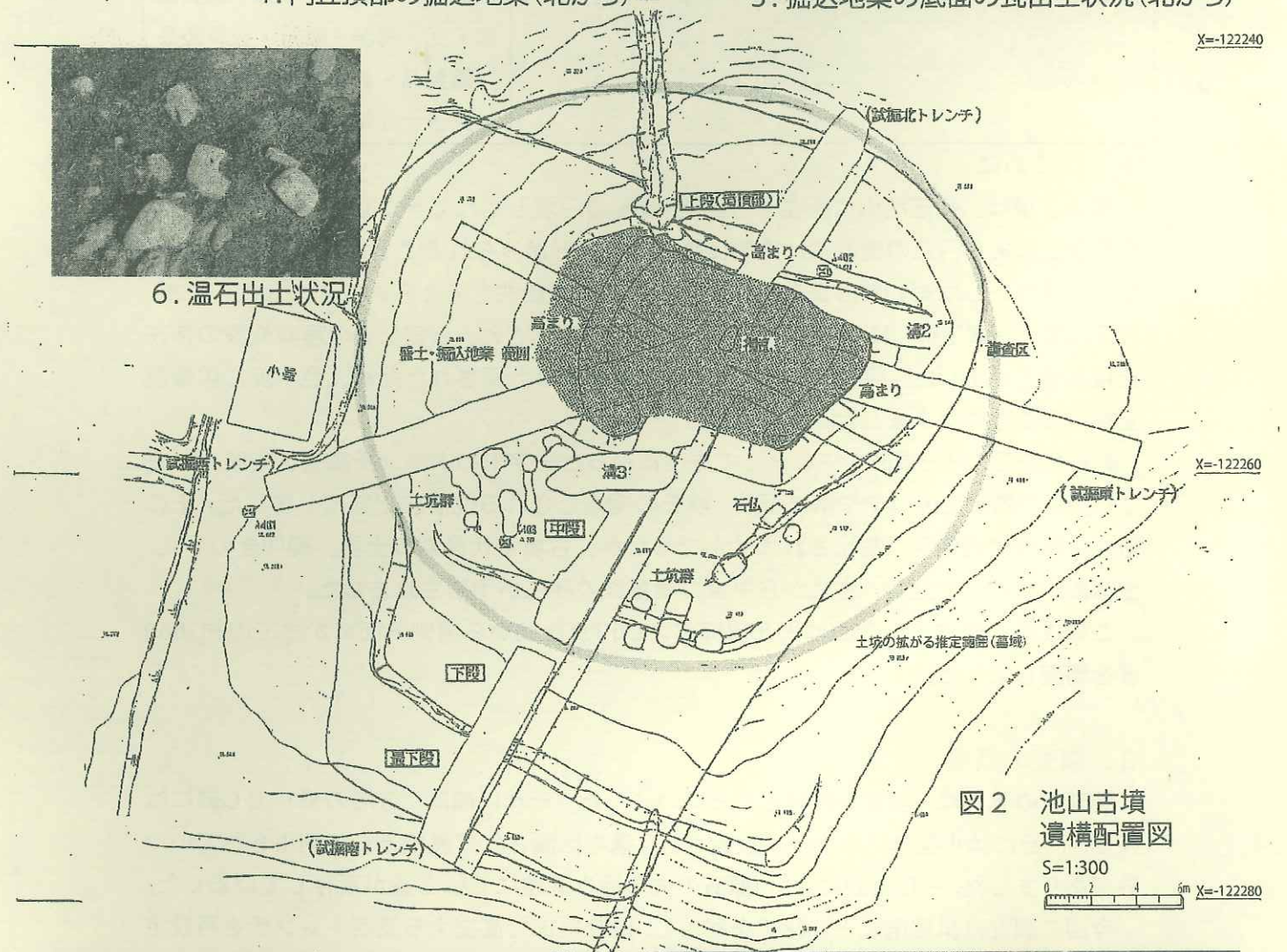
4. 円丘頂部の掘込地業(北から)



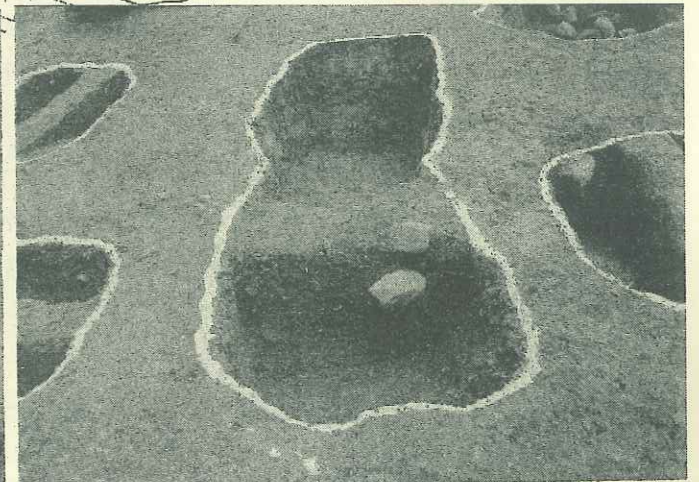
5. 掘込地業の底面の瓦出土状況(北から)



6. 温石出土状況



7. 溝3 埴輪片出土状況(東から)



8. 方形の土坑群(南から)